提　言

『これからの三陸地域の観光復興について』

2011年 9月

東北観光復興研究会
協力　観光庁

はじめに

わが国を代表するリアス式海岸であり、世界三大漁場と言われる豊かな海を有する三陸沿岸が、2011年3月11日、東日本大震災とその後に起きた津波により未曾有の被害を受けました。この地域の漁業と水産業への被害は甚大なものですが、観光についても、地域資源や観光施設、宿泊施設の一部が壊滅的な状況であり、復旧、復興への基本的な方向性の検討は、まだ手つかずのままとなっています。

本研究会は、観光、漁業、港湾、景観、自然環境、地域振興など幅広い分野の専門家とともに、東日本大震災によって甚大な被害を受けた三陸地域を、自立した地域経済の営みが可能な魅力ある国際的な観光エリアとして復興するための基本的な考え方を構築することを目的に、以下の3点を基本方針と位置付け、検討を進めました。

1. 個別の市町村単位や県単位ではなく、三陸地域全域としてトータルな観光復興を目指す

2. 復興のプロセスに応じた観光復興策を提示する

3. 元の観光構造に戻すのではなく、三陸地域の新たな観光の姿を模索する

なお、本提言は、あくまで全体構想、イメージ段階のものです。今後、地元が主体となって地域の特性に応じた観光復興を目指される際に、何らかのお役にたてば幸いです。

本提言の作成に際し、政策研究大学院大学　特別教授　森地茂先生にご監修いただきました。ここに篤く御礼申し上げます。

2011年9月　　東北観光復興研究会

東北観光復興研究会　委員

大野　正人　(財)日本交通公社　理事
熊谷　圭介　(株)ラック計画研究所　代表
毛塚　宏　　財団法人運輸政策研究機構　招聘研究員
齋藤　潮　　東京工業大学大学院　教授
志賀　秀一　(株)東北地域環境研究室　代表
七條　牧生　観光庁観光地域振興部　観光地域振興課長
下村　彰男　東京大学大学院　教授
○ 安島　博幸　立教大学観光学部　教授
婁　　小波　東京海洋大学海洋科学部 教授
［事務局：財団法人日本交通公社］
○印は、座長〈五十音順、敬称略〉

概　　要

1. 三陸観光復興の目指すべき方向

1. 世界に認知された“三陸”の地名と地域特性を生かし、国際的に通用する質の高い観光エリアを目指す
2. “自然資源を見せる”観光だけでなく、これまで埋もれていた多様な地域資源を活用した観光を進める
3. “平成の大津波”の爪痕を防災教育・研修旅行に生かす
4. 新たな観光の付加価値として“インタープリテーション”の充実を図る
5. 生活空間・産業空間の再生においては、景観に十分配慮した美しい街並みとすることで地域の観光魅力の向上を図る
6. 社会資本整備等の復旧・復興の中に「観光」をの視点取り入れる

2. 新たな三陸観光にむけた10の提言　－ 三陸・海と暮らしのツーリズム －

1.漁業との連携、共存による新たな観光事業を展開する

2.海の幸・素材の価値を三陸地域で提供する

3.三陸の暮らしや自然を表現する宿泊・滞在機能を導入する

4. 三陸の生活文化や地域景観を反映した街並みを創出する

5.内陸部と沿岸部の交流をストーリーとした観光を展開する

6.三陸の生きていく知恵を防災教育として全世界に伝える

7.ジオツーリズムによる新しい観光を推進する

8.新たな交通システムで、三陸観光の魅力と利便性の向上を図る

9.広域的な組織体（プラットフォーム）を構築する

10.地域プロデューサーやガイド・インタープリターを育成する

3. 復興プロセスの中で早急に取り組むべき主要項目

今すぐ実施できる主な取り組み

- はじめはボランティアや視察者、次いで防災教育旅行の受け入れ体制整備
- 津波や震災の体験、復興状況などを伝えるガイドの育成
- 三陸地域全体の観光復興を推進する広域組織(プラットフォーム)づくり
- 地域の観光受け入れ状況のきめ細かな情報発信

将来の観光復興へ向けて今から検討すべき主な取り組み

- 津波遺産(仮称)として保存可能な被災構造物、自然地形などの調査とリスト化、指定
- 復元すべき街並みおよび歴史的な建造物の抽出と復元の実施
- 魚市場や水産加工施設などの復興とあわせた観光利用の検討(産業観光などの導入)

4. 復興プロセスの中で時間をかけて取り組むべき主要項目

- 高台移転とあわせた集落による民宿運営の検討と整備
- 日本風景街道の取り組みと連携した観光地域づくり
- 整備が進められる縦横断の高速道路ネットワークを活かした新たな観光ルートの開発
- 色やデザインに配慮した美しい街並みづくり
- 三陸海岸トレイルに接続する遊歩道整備
- 国際的にも通用する質の高い宿泊施設の整備
- 三陸地域一帯で取り組むジオツーリズムの推進と世界ジオパーク加盟

※ 詳細は本編を参照

5. 三陸地域の観光拠点と目指すべき観光復興の方向性

県	拠点	目指すべき観光復興の方向性
青森	八戸	・三陸観光への北の入口 ・新幹線を使った広域観光の拠点 ・地域の食を中心とした都市観光の推進
岩手	久慈	・琥珀とその採掘、翼竜の化石など地域資源の見直しとそれを活かした観光推進 ・平庭高原の闘牛など内陸の地域資源の観光活用
	田野畑	・漁村集落での番屋ツーリズム ・景観展望地（北山崎、鵜の巣断崖）への規制緩和と国際観光地化
	岩泉	・ひと昔前の鍾乳洞観光からの脱却とジオツーリズムへの展開
	宮古	・飲食物販機能の強化と、二次交通の充実により浄土ヶ浜の観光魅力の向上をはかる ・古い港町（港町地区周辺）の再生 ・中心市街地の旅館の魅力向上（朝食、サービスなど） ・重茂半島、とどヶ崎、山田湾の観光利用推進
	花巻	・明治の文化を支えた巨人の足跡をたどるヒューマンツーリズム（宮沢賢治）
	遠野	・明治の文化を支えた巨人の足跡をたどるヒューマンツーリズム（柳田國男・佐々木喜善） ・花巻～釜石を結ぶ内陸の観光と情報の拠点
	釜石	・明治の文化を支えた巨人の足跡をたどるヒューマンツーリズム（大島高任） ・製鉄の歴史と文化を体感する産業観光
	大船渡	・クルーズ船の寄港など海の観光拠点を活かした観光
	陸前高田	・地域の象徴である高田松原の再生を積極的に推進する
	平泉	・周辺地域との連携による世界遺産-平泉の文化遺産-の周遊観光 ・奥大道～十三湊、北上川舟運など奥州の交易路をたどる広域観光 ・平泉を支えた砂金や馬など交易品ゆかりの地を訪れる歴史観光
	一関	・三陸観光への入口

県	拠点	目指すべき観光復興の方向性
宮城	気仙沼	・漁業や三陸の海産物を中心とする「食」を活かした観光 ・屋号通りや唐桑御殿、網元の家など漁港の生活文化の再興
	南三陸	・移転再生にともなう漁村集落による民宿経営と漁業体験
	石巻	・マンガ文化と商店街を楽しむまち歩き観光 ・北上川と沿岸の大規模工場景観の観光活用 ・猫の島（田代島）など離島を使ったシマ旅
	松島	・津波被害を防いだ多島海の景観と古くからの観光拠点
	塩竈	・寿司や生産量日本一の蒲鉾など、食を楽しむ仙台からの日帰り観光 ・塩竈神社の門前町や芭蕉出船の港町など歴史を訪ねるまち歩き観光
	仙台	・東北の観光全般をけん引する文化都市

6. 将来の三陸観光の全体像

4. 近代の偉人の足跡をたどるヒューマンツーリズム

●花巻…【三陸観光への入口】
・明治の文化を支えた巨人の足跡によるヒューマンツーリズム（宮沢賢治）

●遠野
・明治の文化を支えた巨人の足跡によるヒューマンツーリズム（柳田國男・佐々木喜善）
・花巻～釜石を結ぶ内陸の観光と情報の拠点

●釜石
・明治の文化を支えた巨人の足跡によるヒューマンツーリズム（大島高任）
・製鉄の歴史と文化を体感する産業観光

5. 平泉を支えた周辺地域をたどる世界遺産観光

●平泉…【世界遺産】
・周辺地域との連携による世界遺産-平泉の文化遺産-の周遊観光
・奥大道～十三湊、北上川舟運など奥州の交易路をたどる広域観光
・平泉を支えた砂金や馬など交易品ゆかりの地を訪れる歴史観光

●一関…【三陸観光への入口】

●気仙沼…【三陸観光の宿泊拠点】
・漁業や三陸の海産物を中心とする「食」を活かした観光
・屋号通りや唐桑御殿、網元の家など漁港の生活文化の再興

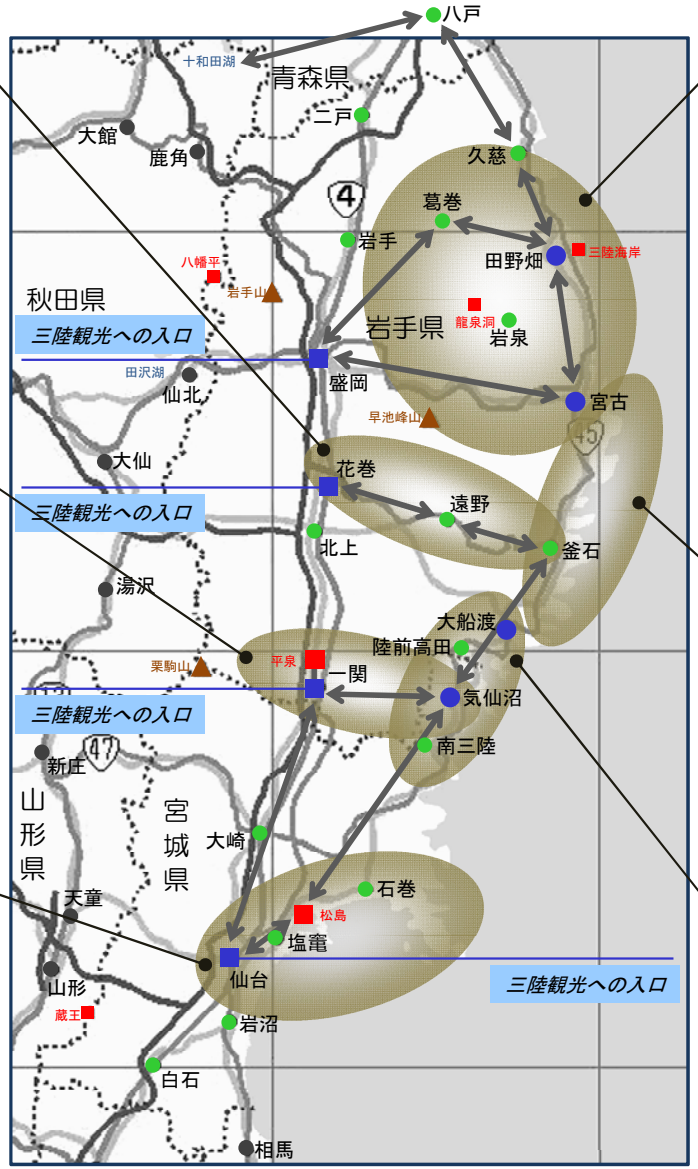
6 松島の多島海の景観に触れる仙台からの日帰り観光

●石巻
・マンガ文化と商店街を楽しむまち歩き観光
・北上川と沿岸の大規模工場景観の観光活用
・猫の島（田代島）など離島を使ったシマ旅

●松島…【三陸観光の宿泊拠点】
・津波被害を防いだ多島海の景観と古くからの観光拠点

●塩竈…寿司の町、奥州一宮鹽竈神社と日本三大船祭り

●仙台…【三陸観光への入口】
・東北の観光全般をけん引する文化都市



1 海業と連携した番屋ツーリズム・体験型教育旅行

●久慈
・琥珀とその採掘、翼竜の化石など地域資源の見直しとそれを活かした観光推進
・平庭高原の闘牛など内陸の地域資源の観光活用

●葛巻…再生可能エネルギー（風力、酪農）

●田野畑…【三陸観光の宿泊拠点】
・漁村集落での番屋ツーリズム
・景観展望地（北山崎、鵜の巣断崖）への規制緩和と国際観光地化

●宮古…【三陸観光の宿泊拠点・内陸交通のターミナル】
・飲食物販機能の強化と、二次交通の充実により浄土ヶ浜の観光魅力の向上をはかる
・古い港町（港町地区周辺）の再生
・中心市街地の旅館の魅力向上（朝食、サービスなど）
・重茂半島、とどヶ崎、山田湾の観光利用推進

2 リアス地形と TSUNAMI から学ぶジオツーリズム

●宮古…【三陸観光の宿泊拠点・内陸交通のターミナル】
・飲食物販機能の強化と、二次交通の充実により浄土ヶ浜の観光魅力の向上をはかる
・古い港町（港町地区周辺）の再生
・中心市街地の旅館の魅力向上（朝食、サービスなど）
・重茂半島、とどヶ崎、山田湾の観光利用推進

●釜石
・明治の文化を支えた巨人の足跡によるヒューマンツーリズム（大島高任）
・製鉄の歴史と文化を体感する産業観光

3 三陸の食と漁業文化を味わう滞在型観光

●大船渡…【海上交通の拠点】
・クルーズ船の寄港など海の観光拠点を活かした観光

●陸前高田
・地域の象徴である高田松原の再生を積極的に推進する

●気仙沼…【三陸観光の宿泊拠点】
・漁業や三陸の海産物を中心とする「食」を活かした観光
・屋号通りや唐桑御殿、網元の家など漁港の生活文化の再興

●南三陸
・移転再生にともなう漁村集落による民宿経営と漁業体験

本　　編

1. 三陸観光復興の意義と目的

東日本大震災による津波によって大きな被害が生じた三陸地域においては、そこで暮らす人たちの生活再建とその生活を支える主要な産業である漁業の再建が地域の最優先課題といえます。しかし、漁業の復興には、新たな漁船や漁具、漁業施設が必要になるため、まだ時間がかかるものと思われます。

漁業の復興とあわせて、親戚や知人のお見舞いや、津波のつめ跡に触れたり、復興支援のボランティアと地域の人々が交流できる観光は、今すぐに取り組むことができる産業です。そうした観光を短期、中長期にわたって三陸地域の復興に活かすことは、時として地域の人と疎遠になりがちだったこの地域の『観光』そのものを見直し、新しい地域の魅力を見つける機会ともいえます。

松島の遊覧船再開、宮古・浄土ヶ浜の遊覧船再開、田野畑のサッパ船再開等観光復興の知らせが地元住民だけでなく、日本全体を元気づけます。観光をテコにして、三陸地域の復興を目指しましょう。

岩手県田野畑村
（写真・田野畑村HPより）

＜コラム：地域の復興は「観光」から！＞

わが町の観光復興は、住宅の再建、漁業の復興などが終わって10年くらい経過してから・・と考えていたが、4ヶ月たった今では全くその考え方を変えている。

お見舞い客、各種ボランティア、視察客など、多くの方々がわが町を訪れてくれ、地元の住民と交流してくれることこそが経済的にも精神的にも重要であるということが分かった。

これを「観光」と言えるのかどうか分からないが、新しい形の「観光」が確実に芽生え始めていることは確かで、それが我々の元気の源になっている。改めて「観光」に対する認識を新たにしている。　（三陸地域の自治体　首長の言葉）

2. 三陸観光復興の基本方針

1. 個別の市町村単位や県単位ではなく、三陸地域全域としてトータルな観光復興を目指す

三陸地域の観光復興に市町村や県が個々別々に取り組むのではなく、三陸地域全体（広域観光圏）として、内陸部の観光地や東北全体の観光地とも連携して観光復興を目指します。

2. 復興のプロセスに応じた観光復興策を提示する

観光は直接被災した地域への経済効果や交流効果が期待できる一方で、観光まちづくりは長い時間を要する継続的な取り組みです。社会基盤やまちづくり等様々な復興の段階に応じて、望ましい観光施策を提示します。

3. 元の観光構造に戻すのではなく、三陸地域の新たな観光の姿を模索する

東日本大震災以前の状態に復旧することを目標とするのではなく、新しい価値観に対応する新たな観光の姿を模索します。リピーターが増える中で何度来ても楽しめる、そして滞在型にも対応できる観光地域づくりを進めます。

『観光』で三陸復興を元気づけます

3. 三陸観光復興のグランドデザイン

これまでの三陸観光

1. 陸中海岸国立公園を中心に自然資源を見せる観光が主体で、歴史や文化等の地域資源の発掘活用は進んでいませんでした。
   ～北山崎、浄土ヶ浜、龍泉洞等を見て回る従来型の観光が主体となっていました。

2. 周遊観光中心の観光スタイルのため、各地域での滞在時間は短く、地域の人々との交流等の機会は充分にはありませんでした。
   ～盛岡－宮古周辺周遊（北山崎、龍泉洞）、次いで仙台－松島－気仙沼に至るルートがメインとなっていました。

3. その背景には、限られた交通ネットワークと限られた宿泊拠点であったことが挙げられます。
   ～新幹線駅からの東西往復に時間を要する、沿岸部の南北流動は弱いという課題があります。宿泊集積は都市部の中小ビジネスホテルや民宿等が中心となっていました。

4. そうした中で、個人客や教育旅行等を対象として、滞在型にむけた取り組みが各地で見受けられつつありました。
   ～田野畑や南三陸、気仙沼・大島等で漁業体験や着地型のメニューづくりなど新たな取り組みが進められていました。

2011.3.11　東日本大震災

＜コンセプト＞

新たな三陸観光を目指して－「三陸・海と暮らしのツーリズム」－

目指すべき方向

1. 世界に認知された“三陸”の地名と地域特性を生かし、国際的に通用する質の高い観光エリアを目指す

～今回の大震災を契機に、人と人との触れ合いや交流、三陸地域の特徴的な生活文化である「海と暮らし」を生かしながら、国際的にも通用する施設、サービス水準の向上を目指して観光の「質」の転換を図る。

2. “自然資源を見せる”観光だけでなく、これまで埋もれていた多様な地域資源を活用した観光を進める

～海岸景観を中心とする観光ポイントを巡り、海産物をお土産に買って帰る従来型の周遊観光に加えて、津波遺産を含む三陸の地域資源を最大限に生かした新たな観光に取り組む。具体的には、風景や生活の背後にあるもの－漁業・漁村文化、食文化、コミュニティー、ジオ※1、あるいは神楽、民話、奥州藤原氏、伊達藩、製鉄、人物等潜在資源を生かした観光への展開を図る。

※1　地球の営みによりつくられた自然景観等を観光等に生かした取り組み

3. “平成の大津波”の爪痕を防災教育・研修旅行に生かす

～三陸地域は、日本有数の美しいリアス式海岸である半面、その沖合の2つのプレートの破壊によって大地震が発生する。そのため、明治29年、昭和8年等たびたび大津波に襲われてきた。三陸地域には、津波から身を守り生きていくための知恵が数々あり、それらを日本そして世界に発信していくことが、世界中からも求められている。

4. 新たな観光の付加価値として“インタープリテーション”の充実を図る

～地域資源を最もよく知る地元住民や被災体験者等による“語り”、“解説”が人の感動を生む。そうした観光客と地元住民との緊密な交流や絆を大切にしていくためには、「インタープリテーション」※2の充実が重要である。

※2　自然・文化・歴史（遺産）を分かり易く人々に伝えること。知識そのものを伝えるだけではなく、その裏側にある「メッセージ」を伝える行為。あるいは、その技能のこと。

5. 生活空間・産業空間の再生においては、景観に十分配慮した美しい街並みとすることで地域の観光魅力の向上を図る

～これから急速に進む地域の生活空間の再生や防災施設の建設にあたっては、地域固有の景観に十分配慮し、全体として調和のとれた美しい街並みづくりを進める。

6. 社会資本整備等の復旧・復興の中に「観光」の視点を取り入れる

～「用・強・美」※3の理念に基づき、社会資本整備や各種施設整備に、観光客を含めた来訪者の視点、観光的な要素を取り込んでいく。

※3　ローマ時代の建築家ウィトルウィウスが唱えた、「用（機能）」・「強（強度、耐性）」・「美（美しさ）」が一体となって良い建築ができるという概念

体系図

〈コンセプト〉

新たな三陸観光を目指して
―「三陸・海と暮らしのツーリズム」―

〈目的〉

観光をテコとして、三陸地域の復興を目指す

〈基本方針〉

- 三陸地域全域としてトータルな観光復興を目指す
- 復興のプロセスに応じた観光復興策を提示する
- 三陸地域の新たな観光の姿を模索する

〈目指すべき方向〉

1. 世界に認知された“三陸”の地名と地域特性を生かし、国際的に通用する質の高い観光エリアを目指す
2. “自然資源を見せる”観光だけでなく“これまで埋もれていた多様な地域資源を活用した“観光 を進める
3. “平成の大津波”の爪痕を防災教育・研修旅行に生かす
4. 新たな観光の付加価値として“インタープリテーション”の充実を図る
5. 生活空間・産業空間の再生においては、景観に十分配慮した美しい街並みとすることで地域の観光魅力の向上を図る
6. 社会資本整備等の復旧・復興の中に「観光」の視点を取り入れる

新たな三陸観光復興にむけた10の提案

1.漁業との連携、共存による新たな観光事業を展開する
2.海の幸・素材の価値を三陸地域で提供する
3.三陸の暮らしや自然を表現する宿泊・滞在機能を導入する
4.三陸の生活文化や地域景観を反映した街並みを創出する
5.内陸部と沿岸部の交流をストーリーとした観光を展開する
6.三陸の生きていく知恵を防災教育として全世界に伝える
7.ジオツーリズムによる新しい観光を推進する
8.新たな交通システムで、三陸観光の魅力と利便性の向上を図る
9.広域的な組織体（プラットフォーム）を構築する
10.地域プロデューサーやガイド・インタープリターを育成する

これからの三陸地域の観光構造

タイプ別の観光復興イメージ

（1） 新たな三陸観光にむけた10の提言

1. 漁業との連携、共存による新たな観光事業を展開する＝「海（うみ）業」の推進を図る

- 甚大な被害を受けた漁港や漁船、定置網等の漁具、この復旧復興は並大抵ではない。復旧までの間、観光事業による副収入の可能性は少なくない。観光で漁業の復興をバックアップする。
- ここ数十年にわたり、低迷が続く「漁業」の本格的な復旧・復興に、「水産業」に続いて、第3の柱として「海（うみ）業」を位置づけ、漁協との連携のもと、遊漁船やダイビング、漁船を利用した観光遊覧船、海藻や貝類等のオーナー制度（養殖体験）や体験漁業等漁村の地域資源を生かした産業おこしを推進する。
- これまでの漁業・漁村体験の着地型メニューの充実を図り、団体客から個人客対応への再構築を図る。

岩手県・北山崎（写真：JTBF）

植樹活動
（NPO法人森は海の恋人HPより）

牡蠣の養殖には、川が運ぶ森の養分が必要であり、川の流域に暮らす人々と、価値観を共有が必要との考えのもと、「森は海の恋人」という標題のもと、植樹や環境教育を行うNPOでる。修学旅行を受け入れ一緒に植林やなどを行う活動をしている。

タコつかみどり
（愛知県南知多町・日間賀島観光協会HPより）

トラフグやタコで有名な日間島では、漁師による体験漁業（タコつぼ漁、キス網漁、底引網漁等）が行われている。

シュノーケリング
（長崎県小値賀町・おぢかアイランドツーリズム協会HPより）

小値賀町の特色を生かした島暮らし体験の推進を目指し、魅力の発掘や人材育成、受入体制整備を実施。世界46 コースで実施した国際修学企画旅行のうち、平戸・小値賀、長崎市でのプログラムが世界一の評価を獲得した。

2. 海の幸・素材の価値を三陸地域で提供する＝海の恵みで食の魅力づくりを進める

- 世界三大漁場と言われる三陸地域の海の幸を、飲食店で提供される料理としてだけでなく、生産の現場としての漁業、海草類の天日干しなどの食の風景、番屋などの地域の生活文化等と合わせて地域全体として観光復興に活用する。
- 漁師料理の付加価値付けや魚市場など提供場所を工夫し、三陸地域ならではの食の魅力づくりを推進する。
- 世界の魚介料理の研究を進め、料理文化の質を高めるための国際会議、国際交流、料理人の人材ネットワークづくりを進める。
- フカヒレやアワビなどの高級食材を生かした高級料理から新鮮な魚介類を使った日常食、気仙沼ホルモンのようなB級グルメなど様々な料理を「まちなか」で楽しめることが必要であり、「食」の魅力は欠かせないツールとなる。

三陸大船渡浜一番まつり
（写真：岩手県観光協会HP）

漁業組合直営のレストラン
（写真：三重県鳥羽市・鳥羽磯部漁協直営レストラン魚々味（ととみ）HPより）

22支所からなる鳥羽磯部漁業協同組合が、鳥羽志摩の地元で採れた新鮮な魚貝類を提供したいという思いから、漁協組合直営のレストランを開設。三重県内では初の試みであった。

漁業協同組合直営のレストラン
（写真：千葉県鋸南町・保田漁協直営「お食事処 ばんや」HPより）

保田沖の定置網で捕れる豊富で新鮮な魚介類を提供する漁協直営のレストラン。「食事処ばんや」には、入浴施設やばんや横丁（特産物販売施設）も併設されている。

陸奥湊駅前朝市
（写真：青森県八戸市・HACHINOHE ASAGURU WEB SITEより）

八戸市営魚菜小売市場で「陸奥湊駅前朝市」を実施。八戸ならではの獲れたての海の幸から、好みの食材を買い集め、炊きたてのご飯とお味噌汁を注文して食べることが出来る。「八戸あさぐる」として、八戸市内の参加ホテルの宿泊客を対象に、朝市や銭湯など、八戸の朝を満喫していただく乗合タクシーツアーも実施。

3. 三陸の暮らしや自然を表現する宿泊・滞在機能を導入する

- 国際的にも通用し、地域のシンボルとなる質の高い宿泊施設を導入する。可能であれば規制緩和により、国立公園内で環境の優れた、あるいは景観の優れたエリアでの立地を検討する。
- 本格的な住宅復興に民宿機能を導入し、計画的な集落民宿づくりを行う。風呂、食事といったパブリック機能は集落の中で集約し、労働を軽減するとともに集落全体で宿泊施設の機能を果たす。
- 数多くのボランティアを受け入れているものの、地域内に宿泊施設が不足しているため、遠方から通わざるを得なくなったり、厳しい環境の中での宿泊を余儀なくされる等、ボランティアは体力のある人々に限られていく。被災した公的宿泊施設や空き家等を活用し、ボランティア・ツーリズムの宿泊拠点として再生していく。

宮城県・唐桑御殿(本吉唐桑商工会HPより)

大自然の中の宿泊施設
(ニュージーランド・TreetopsHPより)

熱地帯で有名なロトルアにあるトップクラスの高級ロッジ。敷地面積は2,500エーカー以上、推定800年の原生林の森と谷が広がる。敷地内にはマスの生息する川が7本、湖が4箇所、ハイキングやマウンテンバイク、乗馬が楽しめるコースが延べ70km以上点在する。(日通ペリカントラベルネット ニュージーランド店より)

戦前、国立公園内に建てられたクラシックホテル
(長崎県雲仙市:社団法人日本ホテル協会HPより)

昭和10年10月、国有地及び県有地約3,200坪の敷地に雲仙観光ホテルが開業。翌年、雲仙国立公園が日本で初めて国立公園として指定される。

半島の先端という地形を活かした宿泊施設

「嵐を観る宿」をコンセプトに半島の先端に建てられた高級宿泊施設。54,000坪の原生林の中に建てられており、目の前に広がる空と海の移りゆく光景、ときには激しくときにはささやくような波の音、潮の香りや木の香りなど、地球の営みを五感で感じることが出来る。

地域文化を表す伝統建築などを保存し、宿泊施設に活用
(新潟県岩室温泉・高島屋HPより)

250年前の江戸時代からの庄屋屋敷を本館に生かしながら、木造りの美と粋を今に伝える和の宿。国登録有形文化財の指定を受けている。

4. 三陸の生活文化や地域景観を反映した街並みを創出する

- 新たなまちを形成していく地域においては、建物の色やデザイン、屋根の高さやファサードの統一など景観に配慮した新たな街並みの創出を図っていく。
- 津波被災地の歴史的な建物や街並みは、新たに整備するもの、復元するもの、機能を変えるものを明確にしていく。
- 地域住民や行政、外部の専門家などによる組織を設置し、まちづくりや景観に対する地域ごとの方向性を考え、その方向性に沿った美しい街並みを整備する。
- 津波により壊滅的な被害を受けた地域が多い中で、気仙沼等では一部歴史的な建物や街並みが残されている。それらは出来る限り、保存、復元し、なつかしいふるさとの景観として観光資源としての利活用方策を検討していく。
- 建物、街並みの保存、復元と併せて、気仙地方の大工集団「気仙大工」の技術の継承、後継者の育成を行っていく。

宮城県気仙沼市魚町屋号通り
（気仙沼市HPより）

町並みの復元（角海（かどみ）家住宅）
（石川県輪島市黒島地区：asahi.com「輪島の震災復旧事業完了」（2011年08月15日）より）

2007年に発生した能登半島地震で地区内の家屋286軒のうち98軒が全半壊するなど全域で被害を受けた。しかし、その後多くの建物が修復され、2009年６月30日付けで重要伝統的建造物群保存地区に選定された。選定後も街並みの復元が行われている。

黒壁プロジェクトによる景観づくり
（新潟県村上市・『村上のまちづくり』案内人：吉川真嗣HPより）

気仙大工による長安寺山門
（気仙大工建築研究事業協同組合HPより）

城下町の歴史的建造物が多く集まっている安善小路を「市民自らの手」で城下町らしい昔ながらの黒板塀の景観に戻そうと、「黒塀プロジェクト」を開始。ブロック塀を壊さず、その上に木の板を打ちつけ黒く塗ることで、表向き黒塀に変えるもので「黒塀一枚1000円運動」と銘打って展開している。

景観や街並みに配慮していない防災施設の整備事例

＜津波避難マウントと避難タワー＞
防災施設の整備においても、周辺の景観や街並みに配慮したデザインや色彩、素材を導入することが必要。

5. 内陸部の農山村と沿岸部の漁村の交流をストーリーとした観光を展開する

- 内陸部の拠点となる都市や観光地（盛岡、花巻、遠野、平泉、仙台等）との連携を図り、単なる周遊ルートとして結びつくのではなく、神楽や民話等の伝統芸能、人物を訪ねる、伊達藩の歴史、奥州藤原氏の文化、世界遺産・平泉を支えた地域等、地域と地域をストーリーで繋ぐテーマ性の高い観光を展開する。
- 例えば、花巻では宮沢賢治、遠野では柳田国男、釜石では大島高任など明治文化を支えた巨人の足跡をたどるヒューマンツーリズムを展開する。また、平泉・一関・気仙沼では平泉とそれを支えた地域の歴史や文化を学ぶ世界遺産観光を展開する。

岩手県・早池峰神楽
（写真：岩手県観光協会より）

地域の偉人が描かれた小説を活用したまちづくり
（写真：松山市より）

愛媛県松山市は、同市出身の正岡子規、秋山兄弟を主役とした司馬遼太郎の小説「坂の上の雲」ゆかりの地域資源等を活用したまちづくりに取り組んでいる。

地域の伝統芸能をテーマとした観光
（写真：高千穂町観光協会より）

宮崎県高千穂町では、神楽の時期以外でも観光客が夜神楽を楽めるよう、高千穂神社に観光神楽を奉納している。また、特色ある自然・歴史・暮らしを活用し、神楽をめぐるツアーや神楽にまつわる小道具等をつくる等の体験を「神楽ツーリズム」として提供している。

地域の産業をテーマとした観光
（写真：ドイツ観光局より）

ドイツのルール地方は、ヨーロッパ最大の工業地帯で、工業建築物や稼働中の産業施設にが多く存在している。これら産業文化的に貴重な施設と地域の歴史50拠点以上を「産業文化の道」として結んでおり、150年にわたる産業文化の現在までの変遷を見ることができる。

6. 三陸の生きていく知恵を防災教育として全世界に伝える

- 「津波てんでんこ」のように、地域で受け継がれてきた防災伝承を後世に残していくために記録し、それらを防災教育に生かす。
- 津波遺産のうち、教育効果の高いものを防災祈念遺産として保存、防災教育の資源として活用する。あわせてデータベース化、マップ化を急ぐ。
- 津波や震災の記録資料(映像、画像など)の保存と防災教育旅行のﾋﾞｼﾞﾀｰｾﾝﾀｰを兼ねた展示、伝承施設整備を行う。
- 津波の爪跡を端的に表す場所や一見安全と思われていても被災した場所(田老や釜石の巨大防潮堤、姉吉や小堀内の最大遡上高地点等)を訪れ、津波の危険性を体感し、被災者の話を聞くことで、防災意識を高める。
- 津波を想定した避難訓練等、本格的な防災ノウハウの研修を実践することで、防災教育効果を上げる。
- 既に三陸鉄道や体験村・たのはたネットワークが視察および見学受け入れをはじめているため、三陸地域全体で、早急な受け皿体制、仕組みづくりを進める。

三陸鉄道による被災地視察ガイド
(写真:朝日新聞・2011年5月25日)

噴火災害の遺構などの活用
(写真:道の駅みずなしより)

雲仙岳災害記念館を中心に、平成新山の景観や噴火災害の遺構、火山関係の施設、防災施設などを野外博物館として捉えた「平成新山フィールドミュージアム」を展開。普賢岳火山学習プログラムにより修学旅行などを受け入れている。

震災体験プログラム－炊き出し経験
(写真:まち・コミュニケーションより)

阪神・淡路大震災により多大な被害を受けた神戸市長田地区の自治会支援などを行っているボランティア団体などにより、中高生への震災体験学習受入が行われている。震災や復興に向けた取組等の話を聞いたり、炊き出しなどを経験できる。

語り部による被爆体験やボランティアによる慰霊碑等の解説
(写真:広島県教育旅行誘致協議会より)

原爆資料館での見学だけでなく、被爆者の体験を聞いたり、ボランティアによる解説を聞きながら慰霊碑をめぐり、平和や命の尊さを学ぶ。

7. ジオツーリズムによる新しい観光を推進する

- 地殻変動など地球の営みにより形成された特徴あるリアス式海岸の地形や景観、鍾乳洞等に加え、これまでの津波により変化した地形を俯瞰し、被害を受けた構造物を体験できるジオツーリズムを推進する。
- 将来的には、世界ジオパークへの加盟を目指していく。

ジオパークとは、「地球科学的に見て重要な特徴を複数有するだけでなく、その他の自然遺産や文化遺産を有する地域が、それらの様々な遺産を有機的に結びつけて保全や教育、ツーリズムに利用しながら地域の持続的な経済発展を目指す仕組み」であり、2004年に国際連合教育科学文化機関の支援により、世界ジオパークネットワーク（GGN）が発足した。
Wikiより。
岩手県では、2011年2月2日に「いわて三陸ジオパーク推進協議会」が設立され、日本ジオパーク、世界ジオパークの認定を目指そうとしていたところである。

宮城県・金華山千畳敷
（写真：宮城県HPより）

地震によってつくられた海岸地形
（写真：経済産業省・ジオパークより）

室戸ジオパークは、高知県東部の室戸半島に位置し、室戸市全域を範囲としている。地震隆起によって形成された海成段丘、完新世の巨大地震によって離水した海岸地形等をみることができる。

火山噴火と災害からの復興
（写真：経済産業省・ジオパークより）

島原半島ジオパークは、雲仙火山の噴火に対処し、災害からの復興を繰り返しながら、様々な文化や歴史を創り出してきた。2009年に世界ジオパークに登録。写真は、大野木場監視所と被災した当時のまま保存されていている旧大野木場小学校。

火山と共生するまちづくり
（写真：経済産業省・ジオパークより）

洞爺湖有珠山ジオパークは、数十年ごとに激しい変動を見せる噴火を繰り返す有珠山とそこでの人々の生活を見て学び体験できる、「変動する大地との共生」をテーマとしている。写真は、2000年の噴火により被災した菓子工場。

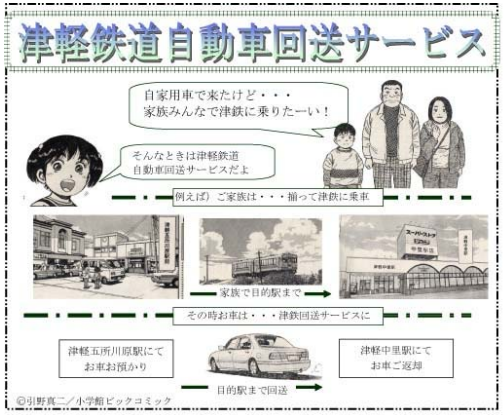
8. 新たな交通システムで、三陸観光の魅力と利便性の向上を図る

- 今後、整備が加速する三陸縦貫自動車道や東北横断道釜石秋田線、宮古盛岡横断道等、早急な高速道路整備を進めたうえで、道の駅やSAの観光的利用（情報拠点、防災拠点、観光拠点として）を進めていく。
- 新しい二次交通手段として電気自動車を活用したレンタカーシステムやオンデマンドのタクシー等の導入を検討する。
- 観光船を利用した際に出発港で自動車を預け、到着港で受け取れるような自動車回送サービスとの組み合わせにより、水上交通の利便性を向上させる。
- 軌道と道路を走ることのできる「デュアル・モード・ビークル（DMV）」により、三陸鉄道の利便性を高める。また、優れた景観のある軌道と道路を組み合わせ、観光の魅力を高める。
- 周辺部に駐車場整備等を行い、まちなかへの自動車の侵入を減少させ、まちなかのにぎわい創出や回遊性向上を図る。

宮城県・道の駅津山(写真：JTBF)

道の駅を地域の観光拠点に活用
（写真：南房総市より）

道の駅とみうら（千葉県）では、地域の農業・商業・工業関係者と連携して、食事や味覚狩り、花摘みなどの着地型ツアーを一括で受発注を行うシステムを構築し、団体客や個人客を誘致している。



鉄道の利便性を高める自動車の回送
（津軽鉄道チラシより）

津軽鉄道株式会社では、津軽鉄道を利用車の自動車を降車駅まで届ける「津軽鉄道自動車回送サービス」を行っている。

既存の軌道と道路を活かした新たな交通機関
（写真：JR北海道より）

DMVは、既存のレールと道路を走行するため、大規模なインフラ整備の必要がなくなる。また、ベースはマイクロバスであるため、燃費、保守費などが従来の鉄道車両と比べ、低コストとなる。JR北海道では2007年より、実用化に向けた「試験的営業」を行っている。

9. 三陸観光復興のための広域的な組織体（プラットフォーム）を構築する

- 三陸全体で観光の質を向上させていくことが必要であり、市域や県域を越え、広域的に三陸観光復興をプロデュースしていく組織体（プラットフォーム）が必要である。
- ここでのプラットフォームとは、各地域の取り組みを総括し、観光客に対してはワンストップ窓口として機能する組織体を示す。
- 広域プラットフォームと地域プラットフォームが役割分担を行いながら、観光振興を進める。広域プラットフォームは、情報発信やマーケティング等を行い、地域プラットフォームは、地域での魅力的なプログラムや商品の造成を図る。
- 観光庁「観光圏整備法」に基づき、「三陸リアス観光圏（仮）」の認定を検討する。
- 観光振興を進めるにあたっては、活動資金を調達するために、自らで仕組み考案することも求められる。
- 社会資本（道路など）整備とあわせた、地域資源の発掘や地域の魅力づくりを進める。

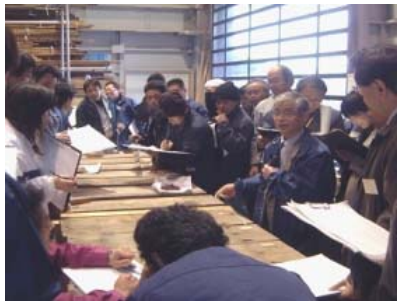
広域プラットフォームと地域プラットフォームの各役割

活動財源を確保する仕組み
（宮城県石巻市：田代島にゃんこ・ザ・プロジェクトHPより）

牡蛎養殖などを行う漁師が、猫を全面に出してユニークな情報発信を実施。猫好きのこころを捕まえ財源確保。

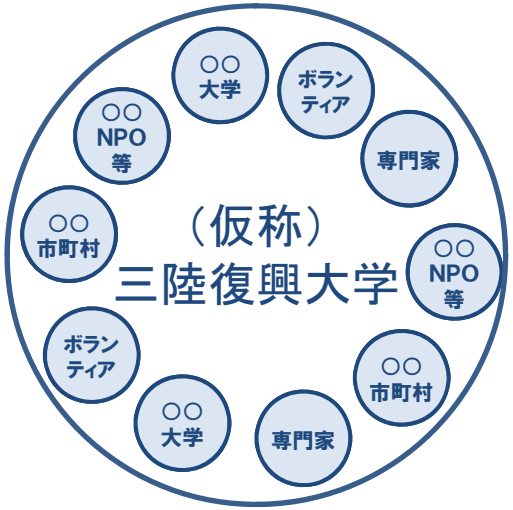
10. 地域プロデューサー（企画・調整者）やガイド・インタープリター（オペレーター）等を育成する

- すでに進められつつあるまちづくりの計画や構想づくりに出来る限り観光の専門家が参画し、観光交流を意識した観光まちづくりに寄与する。このような複合的な観光復興を推進していくためには、地域をプロデュースしていく専門家の存在が欠かせない。そうした人材の派遣制度の早急な導入が期待される。
- 観光客に津波被害や漁業等の地域産業、文化や生活の知恵等を伝えるガイド･インタープリターを至急に育成する必要がある。ガイドやインタープリターは、見るだけの観光から、体験する、理解する、学ぶ観光には、必ず必要な人材であるが、個々の自治体や民間だけでは、限界があることから、三陸地域全体として組織的計画的に育成していく必要がある。
- 三陸地域の復興に関わる大学や専門家･専門機関、行政、復興ボランティア、地元NPO等で構成される社会人大学「（仮称）三陸復興大学」を設置し、構成員の得意分野を生かした講義やインターン制度等により地域内の人材育成を行う。また、大学では、歴史的な街並みや伝統的な建物の保存や復元を通じて気仙大工などが持つ職人技術の継承も扱う。

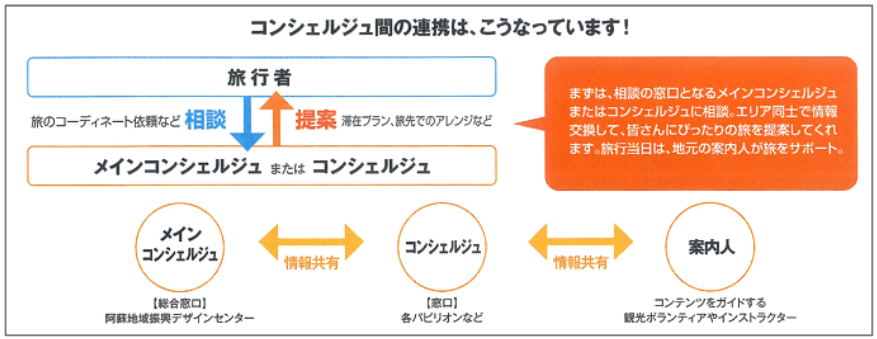


職人技術を受け継ぐための学校
（石川県金沢市：社団法人金沢職人大学校HPより）

金沢に残る伝統的で高度な職人の技の伝承と人材の育成を行うとともに、資料の収集、調査及び公開を図ることにより、文化財の修復等を通じ、匠の技への高い社会的評価と一般の理解と関心を深めることを目的として設置された。



（仮称）三陸復興大学のイメージ



地域の人材育成
（熊本県･阿蘇観光圏HP阿蘇ゆるっと博 コンシェルジュより）

「そこに住む人」と「訪れる人」みんなが楽しめる旅を目指し、阿蘇ゆるっと博開幕に向けコンシェルジュ研修会を開催。

大学のイメージ
（東京千代田区･丸の内朝大学HPより）

朝の1時間を利用して、学んだり、体験できる市民大学。開講して2年、のべ2500人以上の方が通われた。

（２）将来の三陸観光の全体像

4. 近代の偉人の足跡をたどるヒューマンツーリズム

●花巻…【三陸観光への入口】
・明治の文化を支えた巨人の足跡によるヒューマンツーリズム（宮沢賢治）

●遠野
・明治の文化を支えた巨人の足跡によるヒューマンツーリズム（柳田國男・佐々木喜善）
・花巻～釜石を結ぶ内陸の観光と情報の拠点

●釜石
・明治の文化を支えた巨人の足跡によるヒューマンツーリズム（大島高任）
・製鉄の歴史と文化を体感する産業観光

5. 平泉を支えた周辺地域をたどる世界遺産観光

●平泉…【世界遺産】
・周辺地域との連携による世界遺産−平泉の文化遺産−の周遊観光
・奥大道～十三湊、北上川舟運など奥州の交易路をたどる広域観光
・平泉を支えた砂金や馬など交易品ゆかりの地を訪れる歴史観光

●一関…【三陸観光への入口】

●気仙沼…【三陸観光の宿泊拠点】
・漁業や三陸の海産物を中心とする「食」を活かした観光
・屋号通りや唐桑御殿、網元の家など漁港の生活文化の再興

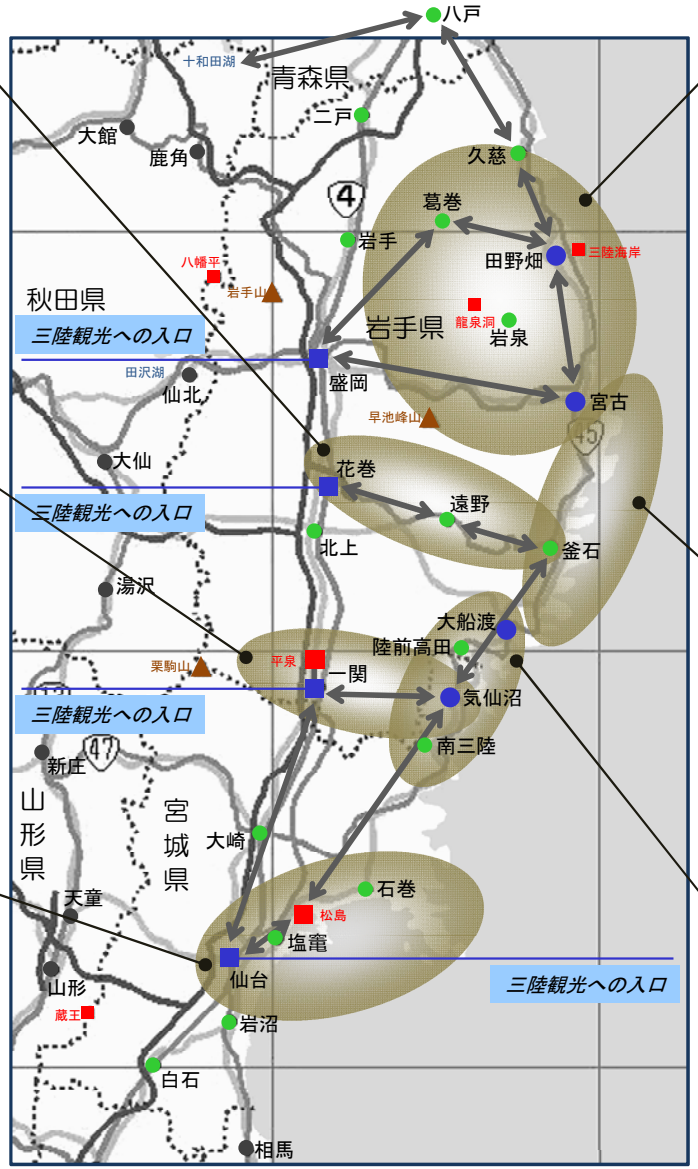
6 松島の多島海の景観に触れる仙台からの日帰り観光

●石巻
・マンガ文化と商店街を楽しむまち歩き観光
・北上川と沿岸の大規模工場景観の観光活用
・猫の島（田代島）など離島を使ったシマ旅

●松島…【三陸観光の宿泊拠点】
・津波被害を防いだ多島海の景観と古くからの観光拠点

●塩竈…寿司の町、奥州一宮鹽竈神社と日本三大船祭り

●仙台…【三陸観光への入口】
・東北の観光全般をけん引する文化都市



1 海業と連携した番屋ツーリズム・体験型教育旅行

●久慈
・琥珀とその採掘、翼竜の化石など地域資源の見直しとそれを活かした観光推進
・平庭高原の闘牛など内陸の地域資源の観光活用

●葛巻…再生可能エネルギー（風力、酪農）

●田野畑…【三陸観光の宿泊拠点】
・漁村集落での番屋ツーリズム
・景観展望地（北山崎、鵜の巣断崖）への規制緩和と国際観光地化

●宮古…【三陸観光の宿泊拠点・内陸交通のターミナル】
・飲食物販機能の強化と、二次交通の充実により浄土ヶ浜の観光魅力の向上をはかる
・古い港町（港町地区周辺）の再生
・中心市街地の旅館の魅力向上（朝食、サービスなど）
・重茂半島、とどヶ崎、山田湾の観光利用推進

2 リアス地形と TSUNAMI から学ぶジオツーリズム

●宮古…【三陸観光の宿泊拠点・内陸交通のターミナル】
・飲食物販機能の強化と、二次交通の充実により浄土ヶ浜の観光魅力の向上をはかる
・古い港町（港町地区周辺）の再生
・中心市街地の旅館の魅力向上（朝食、サービスなど）
・重茂半島、とどヶ崎、山田湾の観光利用推進

●釜石
・明治の文化を支えた巨人の足跡によるヒューマンツーリズム（大島高任）
・製鉄の歴史と文化を体感する産業観光

3 三陸の食と漁業文化を味わう滞在型観光

●大船渡…【海上交通の拠点】
・クルーズ船の寄港など海の観光拠点を活かした観光

●陸前高田
・地域の象徴である高田松原の再生を積極的に推進する

●気仙沼…【三陸観光の宿泊拠点】
・漁業や三陸の海産物を中心とする「食」を活かした観光
・屋号通りや唐桑御殿、網元の家など漁港の生活文化の再興

●南三陸
・移転再生にともなう漁村集落による民宿経営と漁業体験

（３）タイプ別の観光復興イメージ

①　漁村集落タイプ

①集落移転にともなう民宿機能の再編：
→集落が運営する民宿、新築する住宅に宿泊機能の追加
→被災以前から民宿による宿泊者受け入れをしていた集落について重点的に提示

②地域の産業への観光の取り入れ手法：
漁業施設（番屋、漁船船溜りなど）への観光機能の追加

●地域のコミュニティセンター例
　建築家の伊東豊雄氏が提案し、くまもとアートポリスの関係者の支援によって第1号が仙台市内に建設される「みんなの家」は、「人々が集まり、語り合い、そこから何かが発信され、創造されていくようなコミュニティのための建築（「みんなの家を描こう」より抜粋）」を目指している。
　伊東氏の「みんなの家」は臨時の施設として建設するものであるが、被災地の復興が進むなかで、地域の恒久的な交流のための施設へと生まれ変わることが期待されている。

「みんなの家」を描こう

2011年3月11日に起こった東日本大震災は日本がこれまで経験したことのない大きな被害を与えました。10万人以上の人々が家を失い避難所や仮設住宅での生活を余儀なくされています。

避難所での暮らしはプライバシーもなく、寝泊りするスペースを確保するのが精一杯ですまた仮設住宅での暮らしも無味乾燥なユニットの羅列に過ぎません。いずれもここでの暮らしは非人間的な極限状態の生活なのです。

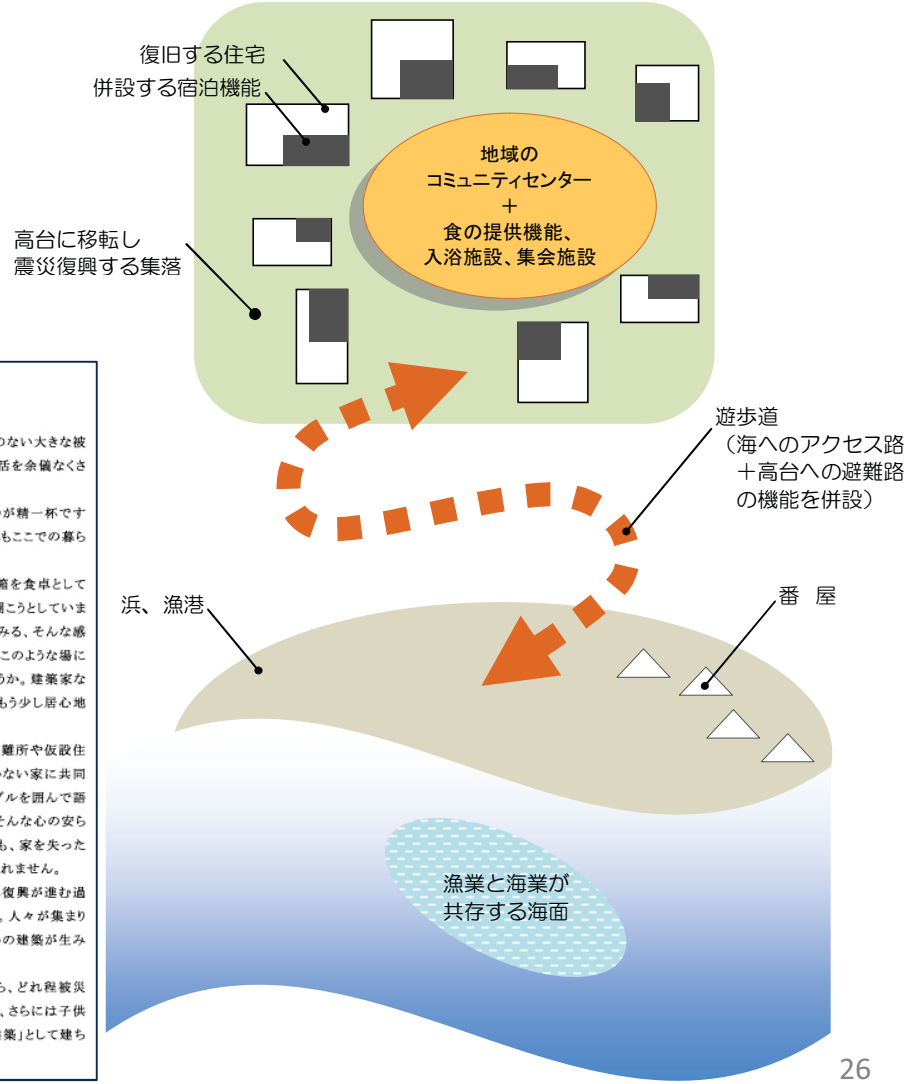
しかしこのような生活においても、人間らしく生きたいと願う人々は、空き箱を食卓として笑顔で食事を楽しもうとします。或いは仮設住宅の狭間でミニコンサートを開こうとしています。極限状態でも人々は集まり、何らかのコミュニケーションを交わそうと試みる、そんな感動的な姿に私達は、最も原初的なコミュニティを見ることができます。そしてこのような場に最低限のかたちを与えることこそが建築の始まりと言えるのではないでしょうか。建築家ならばそうした食事やミニコンサートの場をもう少し人間的に、もう少し美しく、もう少し居心地良くすることが出来るはずです。

このような始原の建築を私は「みんなの家」と呼びたい。そして被災地の避難所や仮設住宅の間に、この「みんなの家」をつくりたい。それは謂わばベッドルームしかない家に共同のリビングルームをつくるような試みです。そこに行くと人々がソファやテーブルを囲んで語り合うことができ、またコーヒーを飲みながら本や新聞を読むことができる、そんな心の安らぎを得られる場所、それが「みんなの家」なのです。それはいかに小さくとも、家を失った人々が心のなかでなら抱くことのできる「私の家」に代わることができるかもしれません。

さしあたりこの「みんなの家」はテンポラリーなものでしかありません。しかし復興が進む過程でそれは、恒久的な「みんなの家」に生まれ変わっていくかもしれません。人々が集まり語り合い、そこから何かが発信され、創造されていくようなコミュニティのための建築が生み出されるかもしれないのです。

このような「みんなの家」のアイデアを世界中の人々に描いていただけたら、どれ程被災地の人々を勇気づけることができるでしょうか。建築家や建築を志す学生達、さらには子供や被災地の人々などさまざまな人々のさまざまな「みんなの家」が「始原の建築」として建ち上がっていく風景を待望しています。

高台移転とあわせた漁村集落の観光拠点整備　概念図



②　半島・岬（リアス式地形）タイプ

リアス式地形を形成する半島･岬は、現在、景観展望園地整備など観光への利活用があまり行われていない。

①リアス式地形の半島･岬の観光活用：
- ･景観展望地として大～小規模の整備イメージ

<u>大規模整備</u>
→国際水準の小規模宿泊施設の建設(突端部)
→半島･岬の散策路兼宿泊施設への遊歩道整備

<u>中規模整備</u>
→展望施設や休憩施設(トイレ、四阿、ベンチなど)の整備
→半島･岬の散策路･遊歩道の整備

<u>小規模整備</u>
→トイレやベンチの設置

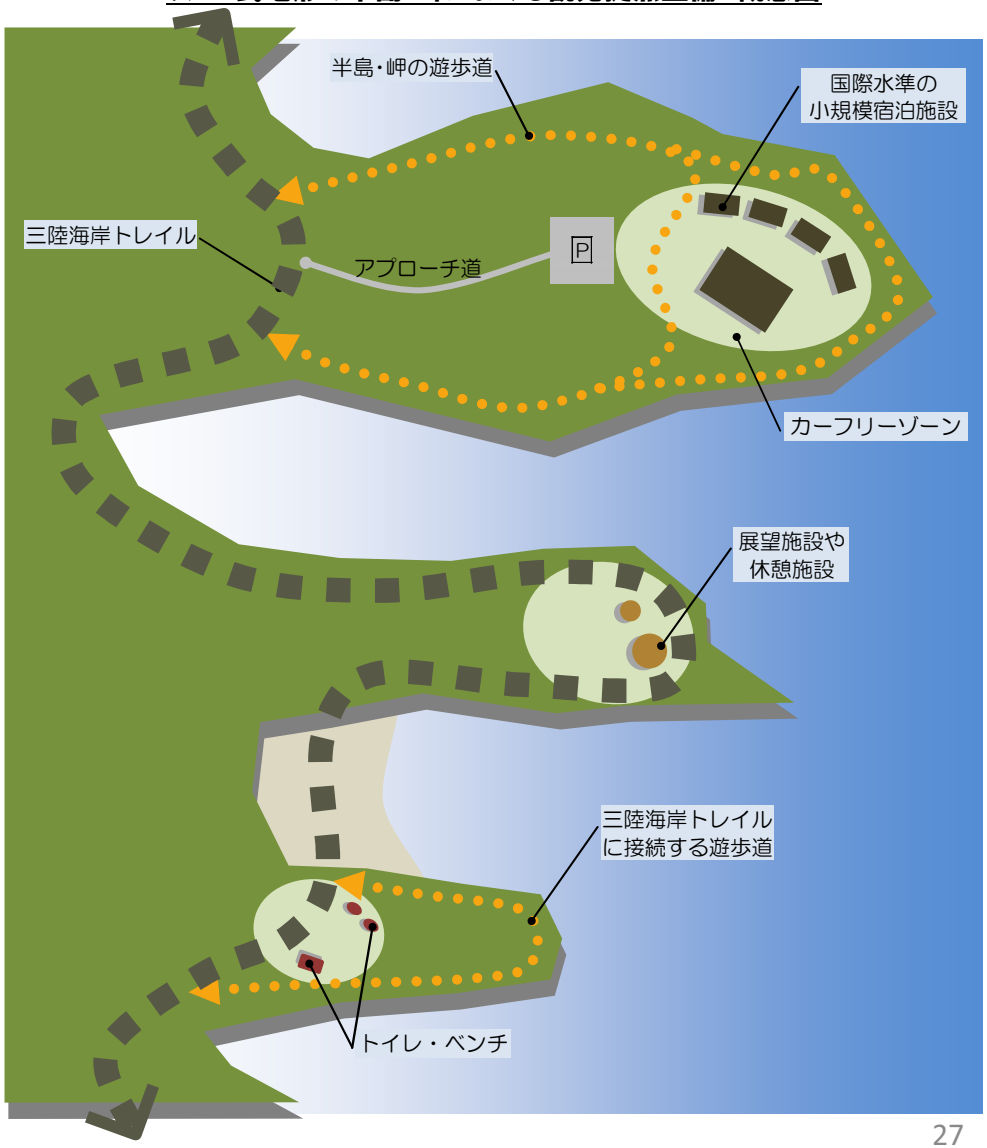
②三陸復興国立公園と連携した整備：
- ･環境省「三陸海岸トレイル」に接続する遊歩道整備

●独特な地形や自然環境を楽しむ観光活用例

半島や岬の景観を海上から探訪する体験型観光の推進

遊歩道のガイドツアーなど地球を楽しむプログラムの再生と充実

<u>リアス式地形の半島･岬における観光拠点整備　概念図</u>



③　漁港都市タイプ　…　気仙沼を中心とした広域観光の展開イメージ

三陸地域の観光復興で重要となるのが観光拠点となる「漁港都市」である。

「漁港都市」のなかで、観光拠点として最も重要な「気仙沼」と「宮古」をモデルとして中長期的な広域観光の展開イメージを提示した。

③　漁港都市タイプ　…　気仙沼のエリア別展開イメージ

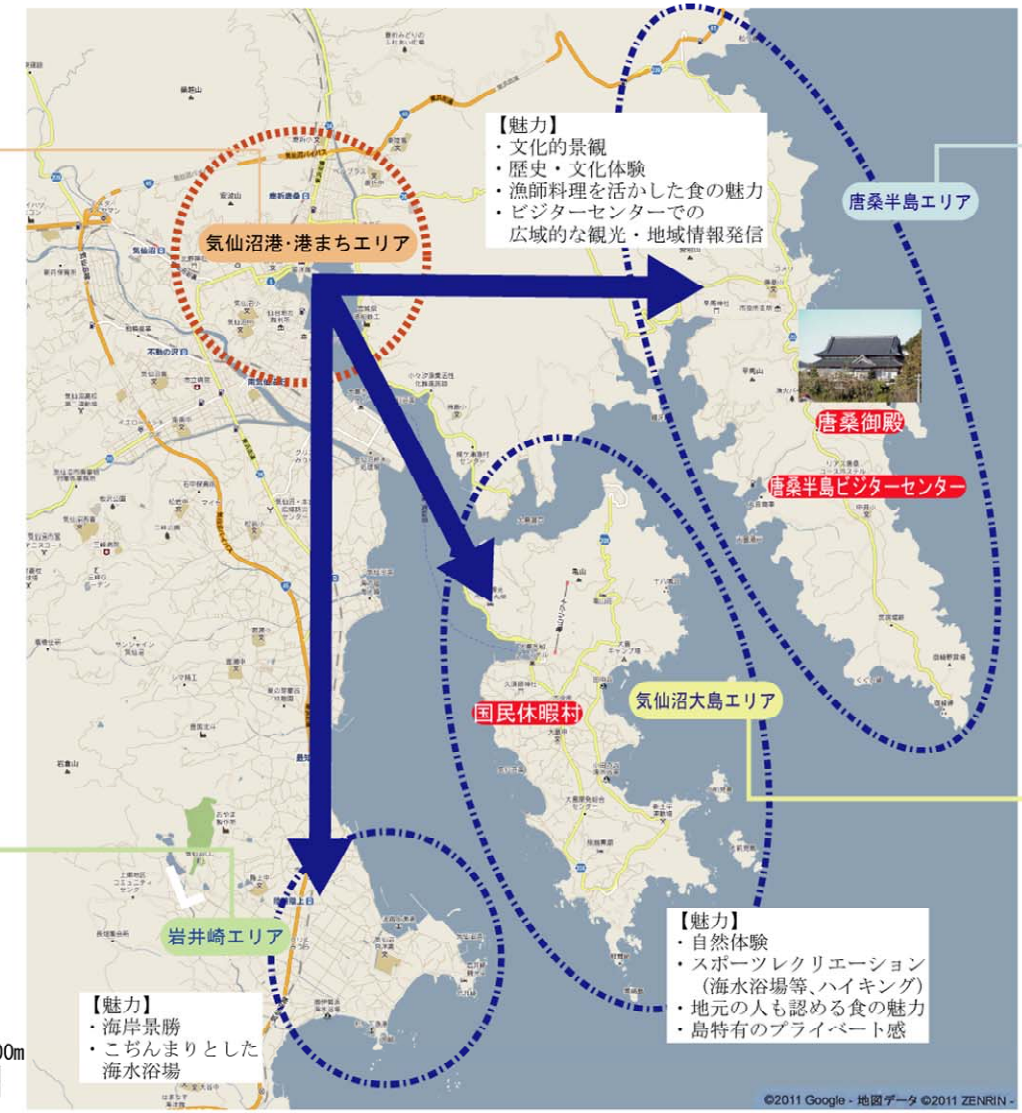
気仙沼の4つのエリアに区分し、それぞれの役割と方向性を把握した。特に「港まちエリア」の復興をどうしていくかが課題となる。

気仙沼港・港まちエリア

被災前は、国内有数の漁業基地であり、水産加工業が集積する地域であった「港まちエリア」を復興し、地域の食や食文化の魅力を活かした観光を推進する。
屋号通りなどの歴史的な街並みの復元や、魚市場や水産加工場など、地域ならではの産業を見せる産業観光など地域資源の見直しとあわせた観光復興を行う。

岩井崎エリア

凹凸の激しい岩肌の独特な海岸景観や海水浴場として知られたる海浜、古生代ペルム紀の地層など地域資源を観光に活用する。



0　2000　4000m

唐桑半島エリア

唐桑御殿と呼ばれる、遠洋漁業の船員が建てた豪華な住宅建築の集積が特徴。被災した唐桑御殿の修復とあわせて、飲食や物販、宿泊施設など、観光を基軸とする建物の利活用を推進する。

気仙沼大島エリア

東北でも最大規模の有人離島。海岸の景観と島内で提供される海産物を中心とする食を用いて、滞在型観光を推進する。
2018年に鹿折～大島間に架橋が完成する計画がある。

③　漁港都市タイプ　…　宮古内陸部から沿岸部のエリア別展開イメージ

宮古を4つのエリアに区分し、それぞれの方向性や連携のイメージを整理した。

③　漁港都市タイプ　…　漁港都市中心部の観光復興イメージ

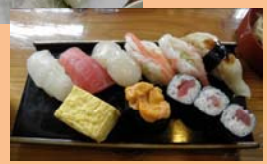
漁港都市のにぎわいの核となる「漁港周辺」の復興イメージを以下に整理した。

道の駅・客船ターミナル・海の駅などの複合化
- バスや自家用車で来訪する観光客のための玄関口として整備。
- 周辺地域の観光情報や体験プログラム情報を総合的に発信。地域の体験型観光の拠点に。
- 旅客船やプレジャーボート・バースの複合化により、海陸交通の結節点となる機能を拡充。

ランドマークとなる山の散策ルート化
- 漁港の街全体を一望できる絶好のロケーションを活かすための散策ルート化。

歴史的な雰囲気を残す漁師まちの形成
- 飲食店（レストラン、水産加工品立ち食い、飲み屋など）物販店（水産加工品販売、土産品販売など）を計画的に集積させた街並み整備。
- 屋台村のような形態で整備することも可能。
- 漁業や水産加工に関わる歴史文化、漁師の生活文化を学ぶことができるミュージアムを分散整備。
- フリンジ（周辺部）に駐車場を整備し、街なかからは、できるだけ車を排除。
- 背後の高台へ複数の避難ルートを整備。

ビジネス客のための宿泊滞在機能の充実化
- 水産業の盛んな三陸の拠点となる漁港都市らしく、来訪するビジネスマンを対象とした宿泊滞在機能を充実。
- 漁業、水産業の街として、「朝めしが旨い宿」を売りにする。
- 泊食分離を推進し、街に出て夕食を食べられる体制づくり。



高台を活用した宿泊拠点
- 良好な眺望条件を活かし、パブリックな空間（展望公園など）を整備。
- 観光客の避難所としても位置づけて水際部などからの避難ルートを形成。

港の水際に沿ったプロムナード
- ウォーターフロントのパブリックアクセスを確保。
- 護岸部分をかさ上げし、一定の防災機能を持たせる。
- 緑豊かな、快適な歩行環境を創出。（画像：ラック研究所提供）

漁港都市ならではの産業観光として魚市場・水産加工施設等のショーケース化
- 基幹産業の漁業、水産加工施設を集積させ土地利用の再編を図る。
- 魚市場の屋上をデッキ化し、魚の水揚げを近くで見せる場として活用。
- 屋上の一部は、避難場所になるような構造と高度を確保。

（画像左：気仙沼観光コンベンション協会 HP、画像右：三浦市 HP より）

賑わいの核となる臨港緑地や広場
- 居心地の良い舗装広場や芝生園地で構成。
- これらのオープンスペースで、オープンカフェや屋台を使ったマーケットなどを展開しながら賑わいを創出。
- ミニコンサートなどのイベントを展開。

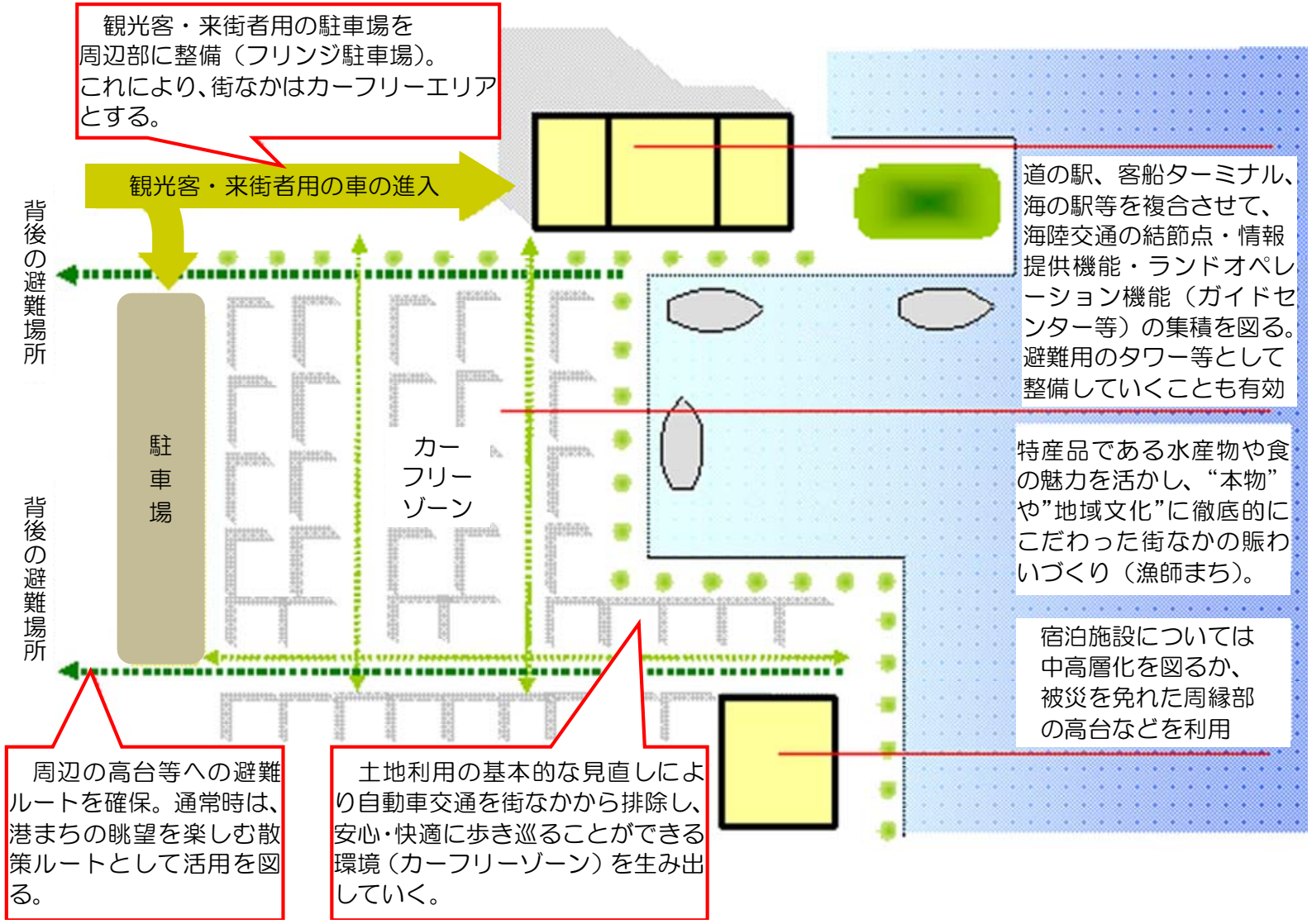
港口部を位置づけるまとまった緑地
- 港の玄関口を演出するボリューム感のある緑地を整備。
- 護岸の構造に配慮しながら、緑地自体はアースデザインを導入し、景観対象としても、視点場としても変化に富む空間を創出。

景観に配慮した市街地や生産ゾーン
- できるだけ植栽などで修景を図る。
- 工場見学や体験などの場として活用を検討。

注）図や画像は、あくまでもイメージとして提示しているものである。

③　漁港都市タイプ　…　漁師まちゾーンの整備イメージ

漁港都市の観光拠点となる「漁港周辺」と「漁師まち」の整備イメージを以下に整理した。



5. 三陸観光復興にむけた今後の取り組み

・観光が復興を元気づける～できることから始める観光
・長期的な観光まちづくりを念頭に、復興計画に観光の視点を入れる

→ ・三陸地域の観光の質的変容、洗練化

短期的な取り組み…
・被災地見舞いや視察、復興支援ボランティアなど「全ての来訪者」の受け入れと案内

中期的な取り組み…
・地元の案内人による地域の生活や歴史、文化を見せる
・海や山など三陸の自然を使った体験プログラムの充実化

長期的な取り組み…
・観光を使った地域づくり、街並みや歴史的な建物の整備
・周辺地域との連携による観光エリアの確立

漁業の復興～海業への展開

ボランティア観光～防災教育旅行・復興プロセスを見せる観光～三陸の海と生活を軸とした体験型観光

津波遺産の指定と保存～三陸全域の津波遺産ネットワーク化～ジオツーリズム推進・世界ジオパークへの加盟

三陸復興国立公園指定～三陸海岸トレイル整備

沿岸と内陸の生活文化を活かした観光

沿岸と内陸の食・食文化の積極的な活用

町なかの歴史的建造物の改修・復元～それを活用した宿泊機能の強化

新たな交通システムの導入～観光の魅力と利便性の向上

観光を担う人材〈オペレーター、企画・調整者、リーダー〉の発掘と育成

三陸観光復興の推進組織〈プラットフォーム〉づくり

参考資料

・各観光拠点が目指すべき観光復興の方向性
・観光の視点から見た社会基盤整備への配慮事項
・東日本大震災復興構想会議の提言より「観光(部分)」

参考資料　各観光拠点が目指すべき観光復興の方向性

（都市名は北から南の順）

県	拠点	目指すべき観光復興の方向性	活用すべき地域資源
青森	八戸	・三陸観光への北の入口 ・新幹線を使った広域観光の拠点 ・地域の食を中心とした都市観光の推進	種差海岸・蕪島、屋台村みろく横丁、魚市場、朝市・朝ぐる、是川・風張遺跡（合掌土偶など）、義経伝説、南部藩の歴史文化、八戸キャニオン
岩手	久慈	・琥珀とその採掘、翼竜の化石など地域資源の見直しとそれを活かした観光推進 ・平庭高原の闘牛など内陸の地域資源の観光活用	琥珀、化石、闘牛（東北唯一）、平庭高原と白樺林、久慈渓流、北限の海女
	田野畑	・漁村集落での番屋ツーリズム ・景観展望地（北山崎、鵜の巣断崖）への規制緩和と国際観光地化	漁村集落、漁村の生活文化（番屋、サッパ船）、酪農と畜産製品、過去の津波の記録
	岩泉	・ひと昔前の鍾乳洞観光からの脱却とジオツーリズムへの展開	鍾乳洞群
	宮古	・飲食物販機能の強化と、二次交通の充実により浄土ヶ浜の観光魅力の向上をはかる ・古い港町（港町地区周辺）の再生 ・中心市街地の旅館の魅力向上（朝食、サービスなど） ・重茂半島、とどヶ崎、山田湾の観光利用推進	浄土ヶ浜、とどヶ崎、本町・新町・鍬ヶ崎上町(花街)などの古い街並み、風待ちの港の歴史
	花巻	・明治の文化を支えた巨人の足跡をたどるヒューマンツーリズム（宮沢賢治）	農村文化、宮沢賢治と彼にまつわる文物、北上川、花巻空港
	遠野	・明治の文化を支えた巨人の足跡をたどるヒューマンツーリズム（柳田國男・佐々木喜善） ・花巻～釜石を結ぶ内陸の観光と情報の拠点	農村文化、南部曲り家、昔話と多くの伝説、民俗学、道の駅
	釜石	・明治の文化を支えた巨人の足跡をたどるヒューマンツーリズム（大島高任） ・製鉄の歴史と文化を体感する産業観光	工業都市の景観、工業港、近代製鉄とその歴史
	大船渡	・クルーズ船の寄港など海の観光拠点を活かした観光	仙台藩の港湾の歴史、野々田ふ頭、碁石海岸、恋し浜駅、点在する石灰石鉱山
	陸前高田	・地域の象徴である高田松原の再生を積極的に推進する	高田松原、気仙大工の技術と文化
	平泉	・周辺地域との連携による世界遺産-平泉の文化遺産-の周遊観光 ・奥大道～十三湊、北上川舟運など奥州の交易路をたどる広域観光 ・平泉を支えた砂金や馬など交易品ゆかりの地を訪れる歴史観光	奥州藤原氏の平安文化と遺構群、平泉を支えた周辺地域と黄金
	一関	・三陸観光への入口	街なかの古い建物（旧沼田家武家住宅、酒の民俗文化博物館、旧横屋酒造など）、石と賢治のミュージアム、渓谷美

参考資料　各観光拠点の目指すべき観光復興の方向性

（都市名は北から南の順）

県	拠点	目指すべき観光復興の方向性	活用すべき地域資源
宮城	気仙沼	・漁業や三陸の海産物を中心とする「食」を活かした観光 ・屋号通りや唐桑御殿、網元の家など漁港の生活文化の再興	網元の生活文化、古い街並み、魚市場、三陸の食文化、唐桑御殿、気仙大島
	南三陸	・移転再生にともなう漁村集落による民宿経営と漁業体験	漁業体験、魚市場とおさかな通り、気仙道と古い街並み、養蚕、産金遺跡
	石巻	・マンガ文化と商店街を楽しむまち歩き観光 ・北上川と沿岸の大規模工場景観の観光活用 ・猫の島（田代島）など離島を使ったシマ旅	南三陸金華山、田代島と猫、マンガ文化、北上川と舟運、漁港と魚市場・寿司、沿岸の工場
	松島	・津波被害を防いだ多島海の景観と古くからの観光拠点	松島、日本三景、瑞巌寺、三陸の食文化
	塩竈	・寿司や生産量日本一の蒲鉾など、食を楽しむ仙台からの日帰り観光 ・塩竈神社の門前町や芭蕉出船の港町など歴史を訪ねるまち歩き観光	寿司、蒲鉾、奥州一宮鹽竈神社とみなと祭(日本三大船祭の１つ)、街なかの古い建物と街並み、貞山運河、浦戸諸島
	仙台	・東北の観光全般をけん引する文化都市	伊達家の城下町、東北の文化都市、都市観光、広瀬川、貞山運河(国内最長)

参考資料　観光の視点から見た社会基盤整備への配慮事項

1. 道路（自動車道、歩道）

- ●歩車道の分離と歩きやすい歩道整備（休憩施設、案内表示、バリアフリーへの配慮など）
- ●町なかへの大型車の乗り入れ制限（中心市街地を迂回する漁港から幹線道路への計画など）
- ●観光的に重要な町並みでの電線電柱の地中化
- ●周辺景観に配慮した自動車道の法面処理（適正な表面処理材や法勾配の選択など）

■歩行者道、自動車道 … 岐阜県　郡上市、飛騨市、高山市

＜街並みに配慮した歩行者道（路地）＞
（岐阜県郡上市）

＜舗装のすりつけによる段差のない歩行者道＞
（岐阜県飛騨市）

＜水辺の遊歩道沿いに置かれた休憩施設＞
（三重県桑名市）

＜電線を地中化し街並みに配慮した歩車道＞
（京都府京都市伏見区）

＜電線を地中化し植栽を配した車道＞
（三重県桑名市）

＜街並みに配慮した地下歩道入口の外観＞
（岐阜県飛騨市）

参考資料　観光の視点から見た社会基盤整備への配慮事項

2. 漁港・港湾・水辺・海岸等

- ●海上からの視点に配慮した港湾緑地等の配置
- ●港湾区域内の適正な分区指定（修景厚生港区の配置など）
- ●観光客の来訪を見込んだ施設計画

■港　湾　…　兵庫県　神戸港・メリケンパーク

＜阪神大震災で被災した港湾施設＞
神戸港メリケン波止場の一部、約60メートルを被災したままの姿で残し、震災の教訓を後世に伝えている。

■漁港・港湾の景観デザイン　…　静岡県　清水港・みなと色彩計画

清水港・みなと色彩計画は、自然景観に調和するよう周辺の色彩に工夫や演出を加え、美しく、人にやさしく、楽しく、機能的で、活気や潤いのある港づくりを目指したガイドプラン。
機能ごとのゾーニングとゾーンごとのカラー計画を策定、選択できる色に幅を持たせて港湾関連施設と工作物を対象に、企業の自主的な塗り替えに向けてアドバイス。
（清水港・みなと色彩計画推進協議会HP／事務局　静岡市経済局商工部清水港振興課より）

参考資料　観光の視点から見た社会基盤整備への配慮事項

3. 駅舎および駅周辺

●案内機能の整備（観光案内所などの配置）
●最低限の商業機能の整備（地域の商業者を脅かさない飲食物販施設などの配置）

■駅舎および駅前広場 … 千葉県　JR佐原駅、岐阜県　JR飛騨古川駅

商家町として重伝建地区となっている佐原の玄関口にふさわしい駅舎のデザインが採用されている。　（千葉県香取市）

小規模な駅舎だが、地元の建築様式（白壁土蔵）の意匠を取り入れた飛騨古川駅駅舎と駅前広場　（岐阜県飛騨市）

地元産の材木を使った飛騨古川駅の待合所。内部にキオスクと観光案内所を整備　（岐阜県飛騨市）

■駅とその周辺の観光案内 … 千葉県　JR佐原駅、岐阜県　JR飛騨古川駅・JR高山駅

佐原駅の駅舎内に整備されている観光案内所。　（千葉県香取市）

飛騨古川駅の待合所内。小規模なキオスクと観光案内所が完備されている
（岐阜県飛騨市）

高山駅前には、多言語対応の観光案内所が整備され案内体制が充実している
（岐阜県高山市）

参考資料　観光の視点から見た社会基盤整備への配慮事項

4. 観光案内サイン

- ●来訪者の移動を意識した統一的な観光案内サインの整備
- ●観光案内サインと防災サインの一体的表示
- ●観光客へのわかりやすい地域情報の発信
  （地名や施設名が地理的かつ視覚的に観光客にわかりやすいように誘導を図る等）

■案内サイン　…　岐阜県　木曽広域公共サイン（看板）

資料：木曽広域連合ホームページ
http://www.kisoji.com/kisokoiki/gyoumu/tiiki/koukyou_sign/sign01.html

観光客などの来訪者は行政界を意識することなく移動するため、自治体を越えて連続性のある情報提供することが望ましく、広域圏で統一的に行うべき事業として「木曽広域公共サインシステム整備」として実施。
観光資源や施設に誘導する標識や地域を紹介する案内板などの公的な情報提供施設であり、「来訪者の円滑な誘導」を主目的としているが、「沿道景観の浄化と地域イメージの形成」を目指して計画された。

■観光案内版と避難誘導サイン

観光案内サインと広域避難場所の明示
「TRAFFIC＆LANDSCAPE PRODUCTS vol5
交通安全･都市環境製品」より

参考資料　東日本大震災復興構想会議の提言より「観光（部分）」

（中略）

地域観光資源の活用と新たな観光スタイルの創出

観光業は裾野の広い経済効果を生み、農林水産業と並び、復興を支える主要産業である。美しい海など自然の景観や豊かな「食」、祭・神社仏閣等の原文化、国立公園や世界遺産などのブランドなどの地域観光資源を広く活用して、東北ならではの新しい観光スタイルを作り上げ、「東北」を全国、そして全世界に発信することが期待される。

その際、復興の過程において、美しい景観に配慮した地域づくりを行い、観光資源とすることも重要である。また、農林水産業等の地場産業への観光の視点を盛り込み、海からのアプローチも意識した新たな観光ルートを形成するなどの創意工夫が必要である。

また、人材育成などを通じ、観光産業にかかわる者だけではなく、農林水産業などの地場産業、地域づくりNPOなど地域の幅広い関係者が「地域ぐるみ」で観光客を受け入れるような体制（プラットフォーム）を形成することが求められる。

復興を通じた人の交流と観光振興

短期的には、風評被害防止のための正確な情報発信や観光キャンペーンの強化などにより、国内外旅行の需要の回復、喚起に早急に取り組むべきである。

また、震災を機に生まれた絆を大切にし、復興プロセスを被災地以外の人々が分かち合うことも大切である。

（中略）

『三陸地域の観光復興のあり方に関する研究』

2011年　９月
東北観光復興研究会

本研究は、財団法人日本交通公社の公益事業（観光文化振興基金）
の一環として実施されました。